

英語教育の不易

福井県英語研究会会長

浅井 裕規

会員の皆様、日頃より本研究会の活動について格別の御理解と献身的な御協力を賜り、心より御礼申し上げます。

本研究会は、本県の英語教育の推進と研究活動の促進を目的に、昭和34年（1959年）に発足し、60余年の歴史と伝統を有しています。会員は県内の中学校と高等学校の全ての英語教員という、全国でも他に例を見ない組織であり、中高の緊密な連携を基盤に、コミュニケーションの手段としての英語の実践指導を推進することを本研究会の発足以来、一貫した基本方針としています。現在、新学習指導要領の下で、以前にも増してコミュニケーション能力の育成を目指す指導が求められています。こうした国が求めている今の英語教育のあるべき姿が、既に半世紀以上も前に本県における英語教育の到達目標となっていたことを知るにつけ、先輩方の先見の明に驚嘆するとともに、それを引き継ぐ我々の責任の重さをあらためて感じるばかりです。

この約3年にわたるコロナ禍の中、本研究会主催の行事の中には、感染拡大防止のためにやむを得ず中止や延期しなければならないものがあるという、厳しい状況にありました。こうした状況においても、本年度は何としても開催するために、万全な感染拡大防止対策を講じたり、オンラインを利用したりするなど、開催方法を工夫して、できるかぎり中止をせずに実施していくことができました。また、行事はもとより、毎日の通常の授業でもコミュニケーション活動が制限される場面もあるかと思います。こうした状況だからこそ、現状に対応した活動方法を前向きに検討して実施することにより、生徒の英語力向上に努めていただきますことをお願いいたします。

本年度、本研究会の総会を3年ぶりに開催することができました。総会後の講演会では、本県出身で青山学院大学名誉教授の土山實男先生に、「日本の生存条件としての国際感覚 ～福井の先達に学ぶ～」という演題で御講演いただくという、貴重な機会に恵まれました。その講演の中で私にとって印象的だったのは、次のような話でした。

人でも国でも国際社会で行動するためには、世界の現実を把握し、世界がどこに向かっているかを見極めることができる「国際感覚」が必要です。この国際感覚が欠如すると、つまり、国際政治の現実を読み誤ると、ロシアのウクライナ侵攻のような国際社会を驚愕させる暴挙が生じてしまいます。そして、「国際感覚のリアリズム」とは、現実的なわきまえのもとに可能な解決策をとるよう努力することであり、こうあってほしいことと現にあることとを区別して、何ができるかを判断しなければなりません。

また、日本の対外政策における国際感覚を考える際に、幕末から維新へと動いた日本で、福

井藩の果たした役割には大きいものがあります。福井藩の松平春嶽を始め、側近の橋本左内、熊本藩から招いた顧問の横井小楠など、福井の先達は新しい政治体制を構想して動きました。彼らに共通するのが国際感覚で、日本のような「周辺」にいる国にとっては、国際社会で使われる言語を用いて相手を認識し、自分を説明することができることが、国家生存の条件でした。19世紀半ば以降、それは英語でした。

このように、世界を把握して見極めることができる「国際感覚」を身につけ、英語を用いて相手を認識し、自分を説明することができることが、今も昔も大切であると土山先生は力説されており、まさに英語教育の本質を突いていることに大きな感銘を覚えました。

次に、本年度に最後に高等学校で全面実施を迎えた現行の学習指導要領について、触れておきたいと思います。文部科学省初等中等教育局の直山木綿子視学官は、「今後を見据えた英語教育や国際理解教育の重要性 ～新学習指導要領に見る英語教育の進む道～」として、次のように述べています。

今回の学習指導要領の改定のポイントは、次の4つです。

- ・小学校の中学年に外国語活動、高学年に外国語科が導入されたこと。
- ・それに伴い、中学校・高等学校の学習内容と目標がより高度化されたこと。
- ・前回の改定から全学年で週4コマの授業を実施している中学校英語科において、言語活動のさらなる充実が図られたこと。
- ・高等学校において、より発信力、伝える力の育成が強化されたこと。

また、全ての目標に「言語活動を通して」と明記されています。言語活動は、コミュニケーションを行なう目的や場面、状況の設定が大事であり、誰に何のためにといった相手意識・目的意識を明確にすることです。今後、世界の人たちとやり取りしていく上で、「相手を意識して発信していく」ことが、とても大切になるのです。まずは言語活動で自分の考えや気持ちを表現し、トライ&エラー、エラー&トライを繰り返しながら進んでいくのです。変化の激しい今の世の中で、子どもたちが社会に出た時に、小・中・高校で身に付けた学び方を必要に応じて生かして、自分で学んでいける力をつけてほしいです。外国語教育は、英語の技能を付けるだけではありません。どうしたら伝わるか、コミュニケーションを行なう目的や場面、状況に応じて適切な語彙や表現を選択するという「思考力」を育てているのです。

この直山視学官の言葉に、前述の土山實男先生の講演内容と共通する部分の大きさを認識させられます。

最後になりましたが、本研究会が本県の小中高校生の英語力の向上、ならびに英語教員の資質・能力の向上にこれまで以上に資することができますよう、御理解と御協力を賜りますことをお願い申し上げ、巻頭言といたします。